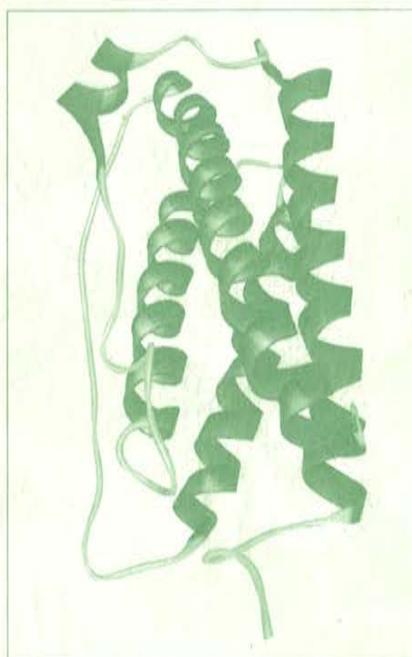


財団年報

平成18年度

Annual Report 2006



(財) 加藤記念バイオサイエンス研究振興財団

Kato Memorial Bioscience Foundation

財団年報

平成18年度

Annual Report 2006

(財) 加藤記念バイオサイエンス研究振興財団

Kato Memorial Bioscience Foundation

目 次

はじめに	1
I. 平成18年度事業報告	
1. 年間の経緯	2
2. 助成事業	
(1) 第18回研究助成	3
(2) 第18回国際交流助成	6
(3) 第17回学会等開催助成	9
3. 研究助成贈呈式	11
4. スナップ写真	19
5. 平成18年度収支決算報告	21
II. 平成19年度事業計画	
1. 助成事業	
(1) 第19回研究助成	22
(2) 第19回国際交流助成	22
(3) 第18回学会等開催助成	22
2. 平成19年度事業予算	23
III. 助成金受領者からの報告	
1. 研究助成	24
2. 国際交流助成	54
IV. 財団の運営と組織	
1. 設立趣意	90
2. 目 的	91
3. 事 業	91
4. 組 織	91
5. 財団の概要	92
6. 平成19年度財団役員、評議員及び選考委員	94
編集後記	96

はじめに

理事長 平田 正

平成18年度は、財団創設時の原点に立ち返り財団の諸事業を見直すために前年に設置されました企画委員会の答申を受け、当財団の特徴となるような研究助成事業を円滑に遂行することから始まりました。一方では、財団の情報開示や透明性確保のためにホームページの大幅刷新や新公益法人会計基準を平成18年度決算から導入するとともに、昨年6月2日には公益法人制度改革3法が公布され、明治29年成立の民法法人から来年12月以降新たに公益認定を受け「公益財団法人」への移行が目指されるなど節目の年度となりました。更に、昨年6月23日にはがん対策基本法の公布、また、同12月22日に新教育基本法の公布・施行といった、少子高齢化が進行する中で国民に強く関心が持たれた法律が制定される所となりました。

このような状況下、当財団の平成18年度の助成活動を振り返ってみますと「若手研究者による独創的・先駆的研究」を助成するという主旨を踏まえながら、新たにバイオテクノロジー分野や女性研究者の更なる支援に繋がるような研究助成事業をはじめ各事業を順調に遂行し得たものと思っております。

先ず第一の柱である「研究助成」につきましては、新たに次の二つの分野に区分し、①メディカルサイエンス分野11名の方々に2,200万円を、②バイオテクノロジー分野11名の方々に2,200万円を、またバイオテクノロジー分野において新設の「奨励研究助成」では6名の方々に600万円を助成いたしました。お陰さまで多数の応募を頂き件数も大幅に増加する所となりました。また、受賞者28名の中、女性研究者が9名を占めるに至り誠に慶びに堪えません。国際交流助成では30名の方々に合計715万円、そして学会等開催助成には7件で140万円を助成することが出来、助成総額は5,855万円と、前年より415万円の増額となりました。

さて、平成18年度の財団理事・評議員の中、財団創立以来永年財団活動にご貢献頂きました理事の伊藤正男先生がご退任となり名誉理事に、評議員の木村光先生には理事に、選考委員長の長澤寛道先生には評議員にご就任頂きました。先生方には引き続き財団活動へのご指導を賜りたいと存じます。

また、本年度は7名の選考委員の先生方の任期満了に伴い新選考委員の先生方6名が選任されました。第一線でご活躍されている、優れたご見識からお力添えを大いに期待しております。

本財団の平成19年度の活動は既に始まっておりますが、来年は財団創立20周年を迎えることになり、記念事業の企画をはじめ、公益財団法人への移行に向けそのスケジュールや定款案の策定などその準備の年ともなりそうです。今年も出捐会社であります協和発酵工業(株)からのご寄付を有効に活用し、これらの諸課題への対応も念頭に置きながら「萌芽的あるいは先駆的研究に注目し、研究助成を続ける」という当財団の理念に則り諸事業を推進致す所存ですので、今後とも皆様方のご指導とご支援を賜りますよう切にお願い申し上げます。

I. 平成18年度事業報告

1. 年間の経緯 (平成18年4月～平成19年3月)

平成18年

5月23日 財団パンフレット更新

6月 2日 第36回理事会・評議員会 経団連会館

平成17年度事業報告及び収支決算承認

6月22日 第18回国際交流助成(前期)候補者選考会 学士会分館

8月 1日 財団年報第7号(平成17年度)刊行

9月21日 第18回国際交流助成(後期)候補者選考会 学士会分館

9月30日 第18回研究助成募集締め切り

12月14日 第18回研究助成候補者選考委員会 経団連会館

研究助成候補者 28名選考

平成19年

2月 2日 第37回理事会・評議員会 経団連会館

平成19年度事業計画および収支予算承認

第18回研究助成候補者承認

3月 2日 第18回研究助成贈呈式 如水会館

通年 第17回学会開催助成は7件に対して実施

2. 助成事業

第35回理事会・評議員会(平成18年2月3日)にて決定された平成18年度事業計画に則り、助成事業として研究助成、国際交流(海外派遣)助成及び学会等の開催助成を実施した。各助成における応募状況と採択率等を下表に示した。

事業名	推薦または申請件数	助成件数	採択率(%)	予算総額(万円)	実績(万円)
研究助成	171	28	16.4	4,400	5,000
「研究助成」メディカルサイエンス分野	62	11	17.7		2,200
「研究助成」バイオテクノロジー分野	77	11	14.3		2,200
「奨励研究助成」(新設)	32	6	18.7		600
国際交流助成	50	30	60.0	750	715
(前期)	24	14	58.3		350
(後期)	26	16	61.5		365
学会等の開催助成	7	7	100	120	140

(1) 第18回(2006年度)研究助成

平成18年度は「研究助成の在り方」を大幅に見直し、従来の「研究助成」を、①「研究助成」メディカルサイエンス分野と②「研究助成」バイオテクノロジー分野に区分すると共に、新たにバイオテクノロジー分野において研究領域を指定した③「奨励研究助成」(領域A：生物機能を利用した物質生産技術に関わる研究。領域B：機能的食品及びその素材に関わる研究。領域C：環境・エネルギーに関わる研究)を設けて募集を行った。財団指定研究機関名簿のAグループ(243カ所)は①、②、③に応募可能、Bグループ(241カ所)は②および③に応募可能として、全国の大学及び公的研究機関(484カ所)及び本財団の理事(13名)、評議員(15名)の合計512カ所に候補者の推薦を依頼したところ171名の候補者が推薦された。応募件数171件につき選考委員会(平成18年12月14日開催)において厳正な審査により、研究助成の候補者として、①「研究助成」メディカルサイエンス分野11名(補欠2名、辞退1名)、②「研究助成」バイオテクノロジー分野11名(補欠2名)、③「奨励研究助成」候補者6名(補欠1名)が選出された。ついで、平成19年2月2日(金)に開催された第37回理事会・評議員会にて、助成対象者合計28名が決定され、平成19年3月2日(金)に研究助成贈呈式が如水会館で施行された。贈呈式では、「研究助成」1件当たり200万円及び「奨励研究助成」1件あたり100万円の助成金目録及び記念の盾を贈呈した。

助成対象者氏名・所属、研究題目を表1に示す。

表 1. 第18回加藤記念研究助成対象者

①「研究助成」メディカルサイエンス分野

番号	氏名	所属機関	職名	研究題目
1	大内 仁	東京慈恵会医科大学生理学講座第2	助手	心筋 α_1 アドレナリン受容体刺激によるCaMKIIの活性制御機構の解明
2	木下 彩栄	京都大学医学部保健学科看護学専攻老年看護学分野	教授	アルツハイマー病原因遺伝子プレセニリンの基質切断機構の解明
3	黒川 峰夫	東京大学医学部附属病院血液・腫瘍内科	教授	白血病幹細胞の生成機構の解明と治療標的の同定
4	佐々木雄彦	秋田大学医学部病理病態医学講座	教授	リン脂質ホスファターゼによる大脳基底核神経細胞の制御
5	渋谷 和子	筑波大学大学院人間総合科学研究科免疫学研究室	助教授	LFA-1/DNAM-1複合体シグナルによるTh1分化の分子機構
6	棚谷 綾	お茶の水女子大学大学院人間文化研究科	助教授	核内受容体機能制御仮説の実験的実証と医薬リード創製
7	中矢 正	北海道大学大学院薬学研究院創薬科学部門	助手	APP結合分子FE65の核内機能の解明
8	波多 賢二	大阪大学大学院歯学研究科	助手	軟骨細胞分化過程におけるSox9転写ファクターの制御機構の解明
9	藤永由佳子	大阪大学微生物病研究所附属感染症国際研究センター	特任助教授	ボツリヌス神経毒素複合体の腸管上皮バリア通過機構に関する基礎的および応用的研究
10	藤本 穰	(独)医薬基盤研究所免疫シグナルプロジェクト	主任研究員	サイトカインシグナル阻害分子SOCSのTh分化における役割と免疫疾患との関連
11	星野 真理	(独)理化学研究所免疫・アレルギー科学総合研究センター	研究員	新規膜結合型E3ユビキチンリガーゼファミリーによる新しい免疫制御機構の解明

②「研究助成」バイオテクノロジー分野

番号	氏名	所属機関	職名	研究題目
1	上杉 志成	京都大学化学研究所生体機能化学研究系	教授	脂肪酸合成を抑える合成化合物
2	大塚 文男	岡山大学大学院医歯薬学総合研究科	助手	生殖内分泌のキーファクターBMPの生理活性メカニズムの解明とその応用へ
3	嘉糠 洋陸	帯広畜産大学原虫病研究センター原虫進化生物学研究分野	教授	マラリア媒介蚊のCO ₂ センシングメカニズムの解明

4	佐藤ちひろ	名古屋大学生物機能開発利用研究センター動物細胞機能研究分野	助教授	脳機能に関わるシアル酸重合体と相互作用する分子の同定とその応用基盤の確立
5	鈴木 章弘	佐賀大学農学部生物環境科学科	助教授	マメ科植物の根粒着生に及ぼす光シグナルの影響
6	田中 克典	関西学院大学理工学部生命科学科	助教授	高等植物におけるSUMO翻訳後修飾機構の基盤的研究
7	田淵 光昭	鹿児島大学大学院医歯学総合研究科健康科学専攻	助手	酵母を用いた病原菌エフェクターの網羅的スクリーニングシステムの開発
8	西村 栄美	金沢大学がん研究所幹細胞医学研究分野	教授	ニッチの分子基盤に着目した幹細胞の維持機構の解明
9	東島 真一	自然科学研究機構岡崎統合バイオサイエンスセンター	助教授	神経細胞可視化手法によるゼブラフィッシュ脊髄神経回路網の解析
10	廣田 俊	京都薬科大学薬学部薬品物理化学教室	助教授	光応答性修飾基を用いた蛋白質-ペプチド複合体の光制御とその利用
11	若杉 桂輔	東京大学大学院総合文化研究科広域科学専攻	助教授	蛋白質間相互作用に着目したトリプトファンtRNA合成酵素の新規機能の探索

③「奨励研究助成」

番号	氏名	所属機関	職名	研究題目	指定領域
1	佐野 健一	(財)癌研究会癌研究所蛋白創製研究部	研究員	安定したタンパク質固層化技術開発に向けたペプチド/無機材料インターフェースの解明	C
2	高野 英晃	日本大学生物資源科学部応用生物科学科	助手	微生物機能の光誘導を制御する新しい転写因子LitRの機能と役割に関する研究	A
3	寺坂 和祥	名古屋市立大学大学院薬学研究科	助手	植物の配糖体輸送におけるABCタンパク質の機能解明とその有用物質生産への利用	A
4	長阪 玲子	東京海洋大学 大学院海洋科学技術研究科応用生命科学専攻	博士研究員	ヒドロキシ桂皮酸ステロールエステルによるアディポネクチン発現増強作用の機構解明	B
5	西野 邦彦	大阪大学産業科学研究所医療基盤研究グループ	特任助手	多剤耐性菌をターゲットとした新規抗菌薬スクリーニングデバイスの開発	A
6	福島亜紀子	女子栄養大学栄養学部保健栄養学科	助教授	カルシウム吸収促進するオリゴ糖(機能性食品)の作用機構に関する遺伝子レベルの解析	B

(2) 第18回(2006年度)国際交流助成

平成18年度の国際交流助成は例年通り雑誌等のメディアを通し公募した。前期(平成18年5月31日締切)応募者24名、後期(平成18年8月31日締切)応募者26名につき選考委員会にて助成候補者が選考され、前期14名(助成金額合計350万円)、後期16名(助成金額合計365万円)の合計30名(715万円)が理事長及び評議員会議長の承認後助成された。

助成対象者氏名・所属・発表学会等を表2・表3に示す。

表2. 第18回加藤記念国際交流助成(前期)対象者

番号	氏名	所属機関	職名	学会名	国、州	助成金(万円)
1	大内 仁	東京慈恵会医科 大学生理学講座 第2	大学院生	第28回国際心臓研究 学会	カナダ	25
2	大西 利幸	京都大学化学研 究所	大学院生	第8回シトクロム P450の生物多様性と バイオテクノロジー についての国際シン ポジウム	イギリス	30
3	小川 寛人	岐阜大学大学院	大学院生	鳥類獣医師会	テキサス州	25
4	金岩 稔	東京農業大学生 物産学部	講 師	種苗放流と養殖業に 関わる国際シンポジ ウム	ワシントン 州	20
5	神村 圭亮	愛知医科大学分子 医科学研究所	研究 技術員	ゴードン会議・プロ テオグリカン	ニューハン プシャー州	25
6	紙谷 聡英	東京大学医科学 研究所・ヒト疾 患モデル研究セ ンター	助 手	アメリカ実験生物学 会	コロラド州	20
7	亀谷 将史	東京大学大学院 農学生命科学研究 科	大学院生	C1代謝に関するゴ ードン会議	イギリス	30
8	許斐 亜紀	聖徳大学大学院 人間栄養学研究 科	大学院生	アメリカ栄養学会	カリフォル ニア州	20
9	作間 未織	東京慈恵会医科 大学小児科学講 座	大学院生	アメリカ小児科学会	カリフォル ニア州	20
10	佐々木義一	京都大学大学院 薬学研究科	大学院生	第29回ヨーロッパ ペプチドシンポジウム	ポーランド	30
11	遠野 雅徳	東北大学大学院 農学研究科	大学院生	国際酪農科学・畜産 学合同学術会議	ミネソタ州	25

番号	氏名	所属機関	職名	学会名	国、州	助成金 (万円)
12	広田 毅	東京大学大学院 理学系研究科	特任教員	生物リズム学会第10 回大会	フロリダ州	25
13	増田 真二	東京工業大学大 学院生命理工学 研究科	助 手	第12回国際原核光合 成生物シンポジウム	フランス	30
14	森本 智	東京慈恵会医科 大学循環器内科	大学院生	ゴードン研究会議 「心臓制御機構」	ニューハン プシャー州	25

表3. 第18回加藤記念国際交流助成(後期)対象者

番号	氏名	所属機関	職名	学会名	国、州	助成金 (万円)
1	伊藤 崇志	大阪大学大学院 薬学研究科	特任助手	アメリカ心臓病学会	イリノイ州	25
2	大園 享司	京都大学大学院 農学研究科	助 手	第6回イネ科草本の 菌類エンドファイト に関する国際シンポ ジウム	ニュージ ーランド	20
3	加藤 秀樹	東京大学医学部 附属病院腎臓内 分泌内科	非常勤 医員	第39回米国腎臓学会	カリフォル ニア州	20
4	国枝 武重	千葉大学大学院 医学研究院循環 病態医科学	研 究 生	米国心臓協会学術集 会	イリノイ州	25
5	佐藤 慶介	東京電機大学理 工学部電子情報 工学科	助 手	2006年合同国際会 議 第210回電気化 学学会秋季大会	メキシコ	25
6	邵 菁	東京大学医学部 附属病院腎臓内 分泌内科	博士 研究員	第11回世界腫瘍学 進展学会及び第9回 国際分子医学シンポ ジウム	ギリシャ	30
7	千葉 知宏	慶應義塾大学医 学部解剖学教室	助 手	第36回北米神経科学 会議	ジョージア 州	25
8	常深 泰司	東京医科歯科大 大学院脳神経病 態学分野	助 手	第56回アメリカ人類 遺伝学会年次総会	ルイジアナ 州	25
9	永井 拓	名古屋大学大 学院医学系研究科	特任講師	第36回北米神経科学 会議	ジョージア 州	25
10	中嶋 秀	九州大学大学院 工学研究院応用 化学部門	助 手	ピッツバーグカンファ レンス2007	イリノイ州	25

番号	氏名	所属機関	職名	学会名	国、州	助成金 (万円)
11	中村 江里	名古屋市立大学 医学部生物機能 制御医学講座	研究員	第6回アジア・オセ アニア生理学会議	韓国	10
12	橋口 晶子	東京大学大学院 総合文化研究科	大学院生	発生過程における細 胞シグナル伝達に関 する国際集会	インド	20
13	平松 伸彦	山梨大学大学院 医学工学総合教 育部人間環境医 工学専攻	大学院生	第39回米国腎臓学会	カリフォル ニア州	20
14	三間 渉	新潟大学医歯学 総合研究科器官 制御医学	大学院生	アメリカ心臓病学会	イリノイ州	25
15	宮本 洋志	筑波大学生命環 境科学研究科情 報生物科学専攻	大学院生	アメリカ生理学会 学会間会議：比較生 理学2006	バージニア 州	25
16	横田 浩章	(財)東京都医学 研究機構東京都 臨床医学総合研 究所	主席 研究員	2006米国生物物理学 会討論分子モーター	カルフォル ニア州	20

(3) 第17回(2006年度)学会等の開催助成

平成18年度開催分の7件の学会等に対して、選考委員長及び理事長・評議員会議長の承認を得て、助成金額を1件20万円とし合計140万円の助成を実施した。学会名等は下記の通りである。

1. 京都大学ウイルス研究所創立50周年記念講演会・国際シンポジウム

開催日：2006年5月29日～31日

場 所：京都大学・百周年時計台記念館、芝蘭会館

申請者：大野 睦人

推薦者：勝木 元也(財団評議員)

参加者：海外9名、国内70名

2. 第12回レチナルタンパク質国際会議

開催日：2006年6月4日～8日

場 所：兵庫県立淡路夢舞台国際会議場

申請者：津田 基之

推薦者：郷 通子(財団評議員)

参加者：海外80名、国内170名

3. 細胞死シンポジウム

開催日：2006年6月21日

場 所：京都国際会議場

申請者：三浦 正幸

推薦者：長田 重一(財団評議員)

参加者：海外100名、国内300名

4. 第8回国際神経免疫学会

開催日：2006年10月15日～19日

場 所：名古屋国際会議場

申請者：田平 武

推薦者：高久 史麿(財団理事)

参加者：海外300名、国内400名

5. 第21回国際高血圧学会学術会議

開催日：2006年10月15日～19日

場 所：福岡国際会議場

申請者：荻原 俊男

推薦者：永井 良三(財団評議員)

参加者：海外3,200名、国内1,800名

6. 国際シンポジウム「配偶子活性化のシグナル伝達」

開催日：2006年11月13日～15日

場 所：東京女子医科大学

申請者：宮崎 俊一

推薦者：香川 靖雄(財団理事)

参加者：海外11名、国内140名

7. 第4回アジア-太平洋化学生態学会議

開催日：2007年9月10日～14日

場 所：つくば市国際会議場

申請者：本田 洋

推薦者：森 謙治(財団理事)

参加者：海外50名、国内120名

3. 研究助成贈呈式

第18回加藤記念研究助成贈呈式は、平成19年3月2日(金)14時から如水会館(千代田区一ツ橋)において受領者(28名出席)、財団関係者・来賓他ほぼ80名の参加のもとに開催された。

式次第としては、理事長挨拶、長澤選考委員長の選考経過報告に続いて、理事長から受領者一人一人に助成金目録および記念盾が授与された。引き続き文部科学省研究振興局ライフサイエンス課課長補佐坂下鈴鹿氏から祝辞が述べられ、その後助成金受領者全員から助成対象となった研究計画の発表に移った。

一人4分の持ち時間であったが、それぞれ研究の背景、計画、成果への期待など良く準備された説明であり大変好評であった。

主な出席者(敬称略)：坂下鈴鹿(文部科学省・ライフサイエンス課課長補佐)、松田 謙(協和発酵・社長)

財団関係者：木下祝郎(名誉会長)、松井正直(名誉理事)、井上一郎(名誉理事)、早石 修(名誉理事)、池原森男(名誉理事)、平田 正(理事長)、土井内徹(常務理事)、大塚栄子(理事)、小田鈎一郎(理事)、岸本忠三(理事)、香川靖雄(理事)、森 謙治(理事)、北原 武(評議員)、木村 光(評議員)、三品昌美(評議員)、中野洋文(評議員)、長澤寛道(選考委員長)、依田幸司(選考委員)、水澤英洋(選考委員)、福山 透(選考委員)、奈良 高(財団OB、以下同様)鈴木武夫、岡 徹夫、小室敏雄、白幡公勝、持田顕一

(1) 理事長挨拶

理事長 平田 正

本日は皆様には大変お忙しい中、第18回加藤記念研究助成贈呈式に多数ご出席賜り誠に有り難うございます。

なお、本日は当財団の主務官庁でございます文部科学省研究振興局ライフサイエンス課課長補佐の坂下 鈴鹿様にもご臨席頂いております。坂下様、お忙しいところ有難うございます。

贈呈式を始めるにあたりまして理事長として一言ご挨拶申し上げます。

加藤記念バイオサイエンス研究振興財団は、協和発酵工業株式会社の創立者でありました加藤辨三郎博士の「バイオサイエンスを通じて社会の発展に寄与したい」という強い念願を実現すべく、協和発酵の創立40周年を記念致しまして1988年-昭和63年12月に設立された財団でございます。

爾来当財団は、「サイエンスの発展には創造的な若い頭脳に期待することが大切である」との認識から「独創的な若手研究者への研究助成」をわが国のバイオサイエンスの発展に最も重要な事業として位置付けて参りました。若手研究者への研究助成および国際交流助成等がそれであります。

皆様、ご承知の通り資源の乏しいわが国は、科学技術の振興なくして21世紀の日本の発展はないとの認識から、科学技術創造立国を国家の基幹戦略として標榜し、科学技術基本法の制定下、平成8年度から科学技術基本計画に基づき様々な施策が推進されており、更に昨年3月には平成18年度から始まる第3期科学技術基本計画が閣議決定され向こう5年間で25兆円という巨額の投資目標額も設定されているところです。

知の世界的競争が果てしなく激化する中、イノベーションー技術革新をどのようにして実現していくか、また、得られた成果を社会や国民に還元し、その帰結として在るべき日本の姿が求められようとしています。しかし、その根幹は正に“人”、皆さん方に代表される若い研究者の頭脳であります。

近年、科学研究費補助金も拡充されてきていますが、ノーベル賞に繋がるような独創的・先駆的な研究・発見は必ずしも大型研究費を伴うものではなく、むしろ個性的で創造性豊かな研究者により既存の制約に捉われず、粘り強い研鑽から生み出されたものであります。

当財団の研究助成金額は微々たるものでありますが、バイオサイエンスの研究分野におきまして、この助成活動を継続することにより、いささかでも若い研究者の皆様の独創的・先駆的な研究を支援したいと考えておる訳であります。

幸い当財団は協和発酵工業株式会社から毎年多大なご支援を戴き、それによって本年度も継続的に研究助成事業を行うことが出来ました。皆様方のご尽力により当財団の評価も着実に高まってまいりまして、若手研究者の助成事業には例年多数の応募を頂いております。その結果、今年度は「国際交流助成」では50名の応募に対し30名の方に総額715万円、「学会等の開催助成」は7件、140万円助成いたしております。

本日贈呈されます「研究助成」では、本年度より従来の「研究助成」をメディカルサイエンス分野とバイオテクノロジー分野に区分するとともに、新たにバイオテクノロジー分野において領域を指定して「奨励研究助成」を設け募集致しました。

その結果、合計171名の応募の中から選ばれました28名の方々に、記念の盾と総額5,000万円(前年比600万円増)の助成金を贈呈致します。なお、28名の方々の内、女性研究者は9名です。

当財団としまして、女性研究者の支援に格別の努力をして参りたいと存じております。

本日助成を受けられます皆様方の研究が、皆様の創意と情熱により、10年後、20年後には果実を結び、わが国のバイオサイエンスの進歩、ひいては日本の産業の礎にまで発展されますように切に祈念致しております。

ご臨席の皆様にも助成を受けられます若き研究者の今後の発展を祈念して励ましのお言葉をお掛け頂ければ幸いに存じます。

終わりに、本研究助成の選考に当たられました選考委員長の長澤寛道先生はじめ20名の選考委員の諸先生の労に感謝申し上げます。

また、本日で臨席の皆様には、加藤記念バイオサイエンス研究振興財団に対しまして今後とも

一層のご支援・ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。どうも有り難うございました。

(2) 選考経過報告

選考委員長 長澤 寛道

ただいまご紹介頂きました、選考委員長を務めさせて頂いております、東京大学大学院農学生命科学研究科の長澤寛道と申します。

本年度の選考経過および結果についてご報告させていただきます。本年度の研究助成は枠組み自体が大きく変わりました。昨年度まではバイオサイエンス全体を一くくりに募集していましたが、その結果としてメディカルサイエンスの申請が多くを占めていました。この偏りを是正するために、研究助成をメディカルサイエンスとバイオテクノロジーの2つの分野に分けました。バイオテクノロジー分野への応募を増やすためにこの分野へは毎年申請できるようにし、さらに若手の研究者には奨励研究としてバイオテクノロジー関係の指定領域を設けました。すなわち、全体は3本建てになりました。また、女性研究者の支援という目的で応募資格年齢を男性より5歳上まで申請を可能にしました。

その結果、申請はメディカルサイエンス分野で62件、バイオテクノロジー分野で77件、奨励研究で32件の申請がありました。これに対して、選考委員のほうもメディカルサイエンス分野のみ、バイオテクノロジー分野のみ、両分野を審査して下さる方の3つに分かれていただき、20名の各分野の専門の先生方にまず第1段階として、書面審査して頂き、次に第2段階目として昨年の12月14日に経団連会館で一堂に会して個別に検討させて頂きました。

その結果、研究助成として、メディカルサイエンス分野11件、バイオテクノロジー分野11件、そして奨励研究6件を選考しました。いずれも14～18%の採択率になりました。以上、選考経過と結果の報告とさせていただきます。

(3) 祝 辞

文部科学省研究振興局ライフサイエンス課課長補佐 坂下 鈴鹿

はじめに、本日、加藤記念バイオサイエンス研究振興財団から、研究助成の贈呈を受けられる研究者の皆様方に心よりお祝いを申し上げます。

21世紀は「生命科学の世紀」と言われております。平成15年4月のヒトゲノムの完全解読以降、現代は、ポストゲノムシーケンスの時代と言われ、最先端の技術を駆使した熾烈な研究開発競争が世界的にくり広げられております。

政府としても、第2期科学技術基本計画や「バイオテクノロジー戦略大綱」などにより、ライフサイエンス分野の研究開発を戦略的に推進してまいりましたが、昨年3月に閣議決定された第3期科学技術基本計画においても、引き続きライフサイエンス研究を最重要分野の一つとして位

置付け、積極的かつ戦略的に推進することとしています。

文部科学省におきましては、タンパク質やヒトゲノムの研究をはじめ、生命現象の統合的理解に関する研究を進めるとともに、このような基礎研究の成果を実際の医療に結びつける橋渡し研究を重視し、各種疾病の解明や革新的な医療の実現に向け積極的な取組みを続けております。また、引き続き、競争的資金の拡充により、基礎研究の振興にも努めてまいりたいと考えております。

このような状況の中、加藤記念バイオサイエンス研究振興財団におかれましては、メディカルサイエンスやバイオテクノロジーなどの分野を対象とし、研究者個々人の真に独創的かつ先駆的な研究を支援する助成事業を行ってこられました。政府の取組みのみならず、民間の御発意によるこのような取組みによって、科学技術振興のより深い基盤が作られることは、欧米の例を見ても明らかであり、貴財団の活動が、我が国の生命科学の発展に多大なる貢献をされていることに、深く敬意を表します。

本日、研究助成を受けられた研究者の皆様におかれましては、我が国における科学技術の振興、とりわけライフサイエンス研究が、急速な少子高齢化社会を迎える我が国が健康で活力ある社会を維持するために極めて重要な研究領域であるということを改めて御認識いただき、なお一層の御精進により、研究に励まれることを期待いたしております。最後になりましたが、皆様の研究と貴財団の今後の一層の御発展を祈念いたしまして、私からの祝辞とさせていただきます。

(4) 祝賀パーティー

贈呈式が滞りなく終了し、助成金受領者と財団関係者の記念撮影後、17時30分から祝賀パーティーの開催となった(如水会館・ペガサスの間)。

最初に当財団の出捐者である協和発酵工業(株)代表取締役社長松田譲氏よりご挨拶を頂戴しました。

挨拶

協和発酵工業(株)代表取締役社長 松田 譲

今日は受賞された皆様方、本当におめでとうございます。また、選考に当たられました先生方、本当にご苦労様でした。

この贈呈式も18回を数えるに至りました。周囲の方々からこの賞は大変に価値があるものとしての評価を時々頂きます。誠に有り難いことだと思っております。

実は、理事長と一緒に財団でお世話になっております伊藤正男先生とお話をさせて頂く機会がございました。中曽根元総理が肝いりで創められましたヒューマン・フロンティア・サイエンス財団が贈呈している助成者の中から実に13人のノーベル賞受賞者がいるとのことをお話を伺いまして、誠にその選考の適格性に感動した訳でございます。この選考の適格性と申しますとこの財団の賞も負けておりません。昨年も触れましたが、第1回目の受賞者の中には、ゲノムの研究で有

名な中村祐輔先生、それから世界で最も論文の引用率が高いと言われます大阪大学の審良静男先生が含まれております。また、第1回の受賞者15名の中10名の方が新たに教授にご就任になっておられます。第1回から第10回までだけに限って調べて参りますと、実に受賞者の59%の方が、6割近い方が新たに教授にご就任になっておられるということでございまして、この賞も適格性においてはヒューマン・フロンティア・サイエンス財団には負けていないと思っている訳でございます。

この適格性を持ってすれば、既に385名の受賞者がおいでになりますのでいずれ近い将来一人位はノーベル賞受賞者が出てもおかしくないのではないかと思う訳でございます。

さて、私は経済同友会で「人口一億人時代の日本」という委員会に加わらせて頂いておりますけれども、その会でのシミュレーションによりますと2050年には何も手を打たなければ、日本はエネルギーも食料も購入するお金が無いという状況に陥ってしまうということになります。そうならないようにイノベーションが大事だとか、科学技術の振興が大事だとか、もうこれは言い尽くされておりますけれども、私ども一企業としてやれることには限度がございますが、精一杯努力を致しまして私どもの出来る範囲内で特に若い研究者の皆様方の研究を助成するという活動に一層力を入れて参りたいと思います。

その為には、いつも申し上げておりますが、企業は収益を上げないとこの活動が続かない訳でございますので、是非協和発酵の事業に対しましてご理解とご支援賜りますよう宜しくお願い致します。本日は誠におめでとうございました。

引き続き、当財団の三品昌美評議員より乾杯のご挨拶を頂戴しました。

乾杯の挨拶

財団評議員(元選考委員長) 三品 昌美 先生

受賞者の皆様、大変おめでとうございます。心からお慶び申し上げます。

今日は非常に多彩で豊かなフィールドから立派な研究計画を聞かせて頂きました。

これは平田理事長のご挨拶にもありましたが、加藤記念財団は昨年一年掛けて色々なアイデアを練ってきました、財団の選考に多彩な視点、評価の視点を複数にするという、そういったことをやった結果で、そういう意味では非常に豊かでおかつレベルの高い研究者が選ばれてきたという感を深く致しました。そういう意味では、常にこの財団自身がいろんな努力をして新しい風を吹き込むということの成果が、今日の受賞者の先生方のお顔を拝見し、また発表を聞かせて頂いて正しく形になって出てきたというふうに感じました。

先ほど、松田社長も言われましたが、やはり日本の将来というのは若い人達がオリジナリティーの高い研究をすることによって成り立っていく、それが日本の未来を担っているということでありますので、受賞者の皆様方の益々のご研究の発展を祈念致しまして乾杯とさせていただきます。

います。

和やかに祝賀パーティが進む中、当財団理事の森謙治先生から助成金受領者に対してお祝いのお言葉を頂きました。

お祝いの言葉

財団理事 森 謙治 先生

本来の専門は有機合成科学であります^が、有機合成科学も生命科学と関係があるのです。実はこの財団が出来ました時に第1回の選考委員会の委員長は伊藤正男先生、私は副委員長で選考させて頂きました。皆様、お帰りになったら是非今日頂いた記念の盾を開いて見て頂きたい。「生かされている」と書いてあります。今日、競争ということが大変重んじられる社会の中で「生かされている」ということは余り考える機会がないのではないかと。私どもがいつも考えますのは、この会社が加藤辨三郎工学博士によって創まった。そして立派とはいいがたい東北沢の研究所で今は当財団の名誉会長をされている木下祝郎先生がやったことは何であるか。皆さん、家庭でグルタミン酸ソーダを使っているでしょう。そして、脳科学をやっている方もグルタメートが大変大事なこともご存知でしょう。池田菊苗、東京大学理学部の理学博士が見つけたものであることも。ところが長い間、それはグルテンの加水分解で製造されていました。ある一時は、アクリロニトリルから始まって有機合成で製造されていた。しかし、有機合成では光学分割をしなければならぬ。光学活性体を簡単に造る方法、それこそが木下先輩がおやりになったことです。当時の生化学、今でもそうかもしれない、つまり代謝に極めて重要な物質が生物体内で蓄積するなんてことはあり得ないと。従って、グルタミン酸を生物体内で蓄積する生物なんていない筈がない。学者というのは、固定概念に執りつかれてしまう。ところが我が愛すべき木下先生は、そんなことはやってみなければ分からない。そこで木下グループは全国から泥を集め、泥の中から微生物をスクリーニングした。そしてコリネバクテリウムを見つけ、それがグルタミン酸を効率よく造るということを見つけたから、今、全世界のグルタミン酸製造はグルテンの加水分解でもなければ、アクリロニトリルからの有機合成でもなくなってしまった。結果として、木下先輩は社長、会長をおやりになったと同時に日本学士院賞を受賞されている訳です。皆さん、先ほど松田社長がおっしゃられたように加藤記念の賞をもらった方から、ノーベル賞が一人でも出る、或いは日本学士院賞受賞者が10人、20人、30人出る、それを皆さんやろうではありませんか。是非、今日賞をおもらいになった皆さん方、これは始まりであります。ただ、今日の助成は協和発酵の社員一人一人が社業に貢献することにより可能になるということをご考えて頂いて、これこそが「生かされている」ということであります。

頑張ってください。皆さんの未来のために乾杯したいと思います。

祝賀パーティには出捐会社である協和発酵工業(株)の研究所からも多数の研究者が出席し、活

発なディスカッションや情報交換が繰り広げられ、助成金受領者を含めた研究者同士の重要な交流の場としても実りあるパーティとなりました。

Intentionally blank page

4. スナップ写真

第18回加藤記念研究助成贈呈式 《贈呈式風景》



平田 正 理事長



長澤寛道 選考委員長



文部科学省 坂下鈴鹿氏



《研究計画発表風景》





第18回研究助成金受領者と財団関係者

《祝賀パーティー風景》



協和発酵工業(株)
松田 謙 社長



三品 昌美 評議員



森 謙治 理事



5. 平成18年度収支決算報告

平成18年度収支計算書

平成18年4月1日～平成19年3月31日まで

単位：円

科 目	予 算 額	決 算 額	差 異	備 考
I 事業活動収支の部				
1. 事業活動収入				
① 基本財産運用収入	3,150,000	3,121,335	28,665	
② 受取寄付金	72,000,000	72,000,000	0	
③ 受取利息	10,000	75,905	△ 65,905	
④ 過年度助成金返戻額	0	1,000,000	△ 1,000,000	
事業活動収入計	75,160,000	76,197,240	△ 1,037,240	
2. 事業活動支出				
① 事業費支出				
研究助成	44,000,000	50,000,000	△ 6,000,000	
国際交流助成	7,500,000	7,150,000	350,000	
普及啓発費	3,000,000	1,517,010	1,482,990	
事業促進費	8,500,000	9,885,442	△ 1,385,442	
年報出版費	1,500,000	1,158,362	341,638	
事業費支出計	64,500,000	69,710,814	△ 5,210,814	
② 管理費支出				
会議費	1,500,000	800,439	699,561	
旅費交通費	4,000,000	2,591,461	1,408,539	
人件費	3,600,000	3,600,000	0	
什器備品費	200,000	0	200,000	
通信費・消耗品費等	1,000,000	1,493,889	△ 493,889	
管理費支出計	10,300,000	8,485,789	1,814,211	
事業活動支出計	74,800,000	78,196,603	△ 3,396,603	
事業活動収支差額	360,000	△ 1,999,363	2,359,363	
II 投資活動収支の部	0	0	0	
III 財務活動収支の部	0	0	0	
IV 予備費支出	500,000	0	500,000	
当期収支差額	△ 140,000	△ 1,999,363	1,859,363	
前期繰越収支差額	13,990,000	15,813,459	△ 1,823,459	
次期繰越収支差額	13,850,000	13,814,096	35,904	

II. 平成19年度事業計画

平成19年度の事業計画は、平成19年2月2日(金)開催の第37回理事会・評議員会にて審議の上、承認された。主要事業は次の通りである。

1. 助成事業

(1) 第19回加藤記念研究助成

1) 「研究助成」

助成対象者：メディカルサイエンス分野は、Bグループの研究機関に属する研究者。
バイオテクノロジー分野は、A及びBグループの研究機関に属する研究者。

助成金額：4,400万円(1件200万円、22件)

推薦者：理事・評議員又は申請者の所属する機関の長(財団指定の研究機関)

応募期間：平成19年6月初旬～8月31日

選考委員会：平成19年12月6日(木)

助成金の贈呈式：平成20年3月7日(金)

2) 「奨励研究助成」

助成対象者：A及びBグループの研究機関に属する研究者。

助成金額：600万円(1件100万円、6件)

推薦者：理事・評議員又は申請者の所属する機関の長(財団指定の研究機関)

応募期間：平成19年6月初旬～8月31日

選考委員会：平成19年12月6日(木)

助成金の贈呈式：平成20年3月7日(金)

(2) 第19回加藤記念国際交流助成

助成対象者：公募

助成金額：前期450万円

後期300万円

推薦者：申請者の所属する機関の長

応募期間：前期 平成19年4月～5月末(4月～9月までの学会対象)

後期 平成19年4月～8月末(10月～翌年3月までの学会対象)

選考委員会：前期 平成19年6月28日(木)

後期 平成19年9月20日(木)

(3) 第18回学会等の開催助成

募集方法：非公募で理事・評議員の推薦による。

助成金額：120万円(1件20万円程度、6件程度)

助成対象：国内で開かれるバイオサイエンス分野の学会等
(参加者数は原則1,000名以下)

2. 平成19年度事業予算

平成19年度収支予算書

平成19年4月1日～至平成20年3月31日

単位：円

科 目	当 年 度	前 年 度	差 異	備 考
I 事業活動収支の部				
1. 事業活動収入				
① 基本財産運用収入	6,000,000	3,150,000	2,850,000	
② 受取寄付金	72,000,000	72,000,000	0	
③ 受取利息	50,000	10,000	40,000	
事業活動収入計	78,050,000	75,160,000	2,890,000	
2. 事業活動支出				
① 事業費支出				
研究助成	50,000,000	44,000,000	6,000,000	
国際交流助成	7,500,000	7,500,000	0	
普及啓発費	1,500,000	3,000,000	△ 1,500,000	
事業促進費	9,000,000	8,500,000	500,000	
年報出版費	1,200,000	1,500,000	△ 300,000	
事業費支出計	69,200,000	64,500,000	4,700,000	
② 管理費支出				
会議費	1,000,000	1,500,000	△ 500,000	
旅費交通費	3,500,000	4,000,000	△ 500,000	
人件費	3,600,000	3,600,000	0	
什器備品費	200,000	200,000	0	
通信費・消耗品費等	1,000,000	1,000,000	0	
管理費支出計	9,300,000	10,300,000	△ 1,000,000	
事業活動支出計	78,500,000	74,800,000	3,700,000	
事業活動収支差額	△ 450,000	360,000	△ 810,000	
II 投資活動収支の部	0	0	0	
III 財務活動収支の部	0	0	0	
IV 予備費支出	500,000	500,000	0	
当期収支差額	△ 950,000	△ 140,000	△ 810,000	
前期繰越収支差額	13,850,000	13,990,000	△ 140,000	
次期繰越収支差額	12,900,000	13,850,000	△ 950,000	

Ⅲ. 助成金受領者からの報告

1. 研究助成

当財団では、研究助成金受領から3年後に助成対象となった研究の成果報告を受けることになっている。以下に第16回(平成16年度)の研究助成金受領者からの報告を掲載した。

なお、この研究報告内容は民間助成研究成果データベースに収録のため国立情報研究所に提供されている。

(1)第16回研究報告

1) 非自律的な細胞死を制御する遺伝子の探索 安達 卓(神戸大学大学院理学研究科)	26
2) 遺伝子ノックアウトによるヒトDNA鎖切断修復機構の解析 足立 典隆(横浜市立大学木原生物学研究所)	27
3) ペア型レセプターによるウィルス感染細胞認識機構の解明 荒瀬 尚(大阪大学微生物病研究所免疫化学分野)	28
4) IL-7を介したT細胞維持機構の構造生物学的解明 池水 信二(熊本大学大学院医学薬学研究部)	30
5) 高次光機能性分子の論理的開発とこれに基づく全く新しい生物領域研究ツールの創製 浦野 泰照(東京大学大学院薬学系研究科)	30
6) 遺伝情報の恒常性維持における複製停止の役割 加藤 由起(東京工業大学バイオ研究基盤支援総合センター)	32
7) 新規情報伝達タンパク質(PRIP)の機能解析 兼松 隆(九州大学大学院歯学研究院)	33
8) セマフォリンSema6DのPlexin-A1を介した自然免疫における役割の解明 熊ノ郷 淳(大阪大学微生物病研究所)	35
9) 外胚葉プラコードからの三叉神経節形成における転写因子Sixの役割 小西 慶幸(三菱化学生命科学研究分子加齢医学グループ)	36
10) 植物の光屈性を制御するフォトトロピン青色光受容体複合体の機能解析 酒井 達也((独)理化学研究所植物科学研究センター)	37
11) DNA修復転写障害と神経変性機構の解明 - TDP1, APTX, SETX異常症の病態解析 高嶋 博(鹿児島大学医歯学総合研究科神経内科)	38
12) 遺伝子改変モデル動物を利用した骨代謝シグナルの研究 高柳 広(東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科)	38

13) マウス胚性幹細胞を用いたエピジェネティクスが関与する 神経幹細胞分化制御機構の解明	
中島 欽一(奈良先端科学技術大学院大学バイオサイエンス研究科)	40
14) ジェノミクスおよびプロテオミクスによる体内酸素動態モニター分子の同定	
南学 正臣(東京大学医学部附属病院腎臓・内分泌内科)	41
15) ヘリコバクター・ピロリ病原因子CagAによる胃発がん分子機構の解析	
東 秀明(北海道大学遺伝子病制御研究所分子腫瘍)	43
16) 成体海馬に内在する神経幹細胞の電気生理学的特性に関する研究	
久恒 辰博(東京大学大学院新領域創成科学研究科)	44
17) 抗感染症を指向した糖鎖合成阻害剤イルマイシンの合成と機能解明	
廣瀬 友靖((社)北里研究所基礎研究所天然物有機化学研究室)	46
18) 内分泌と外分泌の制御因子・低分子量G蛋白質Rab27の活性化機構の解明	
福田 光則(東北大学大学院生命科学系研究科)	47
19) 新規血小板凝集因子Aggrus依存的な癌転移促進機構の解析	
藤田 直也((財)癌研究会癌化学療法センター基礎研究部)	48
20) 動物細胞での網羅的遺伝子機能解析のための高頻度両アレル変異導入法の開発	
堀江 恭二(大阪大学大学院医学系研究科)	49
21) JNK経路によって制御される細胞応答の多様性の解明	
松田 達志(慶應義塾大学医学部微生物学免疫学教室)	50
22) 血管病・メタボリック症候群の転写ネットワークの解明と治療戦略の開発	
真鍋 一郎(東京大学大学院医学系研究科)	51
23) 細胞内Znシグナルによる上皮-間葉転換(EMT)制御機構の解明	
山下 晋(大阪大学大学院生命機能研究科)	52

2. 国際交流助成

国内で実施された研究の成果を、平成18年4月から19年3月の間に海外で開催された学会等で発表するに際し、当財団の助成(第18回国際交流助成)を受けた研究者からの学会等参加報告を以下に記載した。

学会発表報告

前期

- 1) 第28回国際心臓研究学会 (ISHR) 北アメリカ部会総会
大内 仁(東京慈恵会医科大学生理学講座第2) 56
- 2) 第8回シトクロムP450の生物多様性とバイオテクノロジーについての国際シンポジウム
大西 利幸(京都大学化学研究所) 57
- 3) 第27回鳥類獣医師会 年次大会および博覧会
小川 寛人(岐阜大学大学院連合獣医学研究科) 58
- 4) 第3回国際放流・養殖シンポジウム
金岩 稔(東京農業大学生物産業学部) 59
- 5) 第12回プロテオグリカンに関するゴードン国際会議
神村 圭亮(愛知医科大学分子医科学研究所) 60
- 6) アメリカ実験生物学会 サマリーサーチカンファレンス
紙谷 聡英(東京大学医科学研究所ヒト疾患モデル研究センター) 61
- 7) C1代謝に関するゴードン会議
亀谷 将史(東京大学大学院農学生命科学研究科) 62
- 8) 実験生物学総会2006:アメリカ栄養学会
許斐 亜紀(聖徳大学大学院人間栄養学研究科) 63
- 9) 2006年アメリカ小児学会
作間 未織(東京慈恵会医科大学小児科学講座) 64
- 10) 第29回ヨーロッパペプチドシンポジウム
佐々木 義一(京都大学大学院薬学研究科) 65
- 11) 米国際酪農科学・畜産学合同学術会議2006年度大会
遠野 雅徳(東北大学大学院農学研究科生物産業創成科学専攻) 66
- 12) 生物リズム学会第10回大会
広田 毅(東京大学大学院理学系研究科) 67
- 13) 第12回原核光合成生物国際シンポジウム
増田 真二(東京工業大学生命理工学研究科) 69
- 14) 第75回ゴードン研究会議「心臓制御機構」
森本 智(東京慈恵会医科大学循環器内科) 70

後期

1) 米国心臓病学会 年次集会2006 伊藤 崇志(大阪大学大学院薬学研究科)	71
2) 第6回イネ科草本の菌類エンドファイトに関する国際シンポジウム 大園 享司(京都大学大学院農学研究科)	72
3) アメリカ腎臓学会 加藤 秀樹(東京大学医学部附属病院腎臓内分泌内科)	73
4) 米国心臓病会議学術集会 国枝 武重(千葉大学大学院医学研究院循環病態医科学)	74
5) 2006年合同国際会議 第210回電気化学学会秋季大会 佐藤 慶介(東京電機大学理工学部電子情報工学科)	76
6) 第11回世界腫瘍進展学会及び第9回国際分子医学シンポジウム 邵 菁(東京大学医学部附属病院腎臓内分泌内科)	77
7) 北米神経科学会 千葉 知宏(慶應義塾大学医学部解剖学教室)	78
8) 米国人類遺伝学会 第56回年次総会 常深 泰司(東京医科歯科大学大学院脳神経病態学分野)	79
9) 北米神経科学会2006 永井 拓(名古屋大学大学院医学系研究科)	80
10) ピッツバーグカンファレンス2007 中嶋 秀(九州大学大学院工学研究院応用化学部門)	81
11) 第6回アジア・オセアニア生理学会議 中村 江里(名古屋市立大学医学部第一生理学教室)	82
12) インド発生学会2006年年会および発生過程における シグナル伝達に関する国際集会 橋口 晶子(東京大学大学院総合文化研究科)	83
13) 第39回米国腎臓学会 平松 伸彦(山梨大学大学院分子情報伝達学講座)	84
14) アメリカ心臓病学会2006 三間 渉(新潟大学医歯学総合研究科器官制御医学講座)	86
15) 2006アメリカ生理学会国際会議、比較生理学2006：多様性の統合 宮本 洋志(筑波大学大学院生命環境科学研究科情報生物科学専攻)	87
16) 2006米国生物物理学会討論分子モータ 横田 浩章((財)東京都医学研究機構 東京都臨床医学総合研究所)	88

IV. 財団の運営と組織

1. 設立趣意

21世紀に向けて、現代社会が有限な天然資源をもとに繁栄を持続するためには、バイオサイエンス・技術の継続的進歩と、それを活用する関連産業の発展が重要であることは言うまでもありません。

近年における生命科学はゲノムやプロテオーム科学などの先端技術や、それを駆使した細胞レベルの研究分野で日々激しい競争が展開されており、その進歩は目覚ましいものがあります。近い将来、わが国の研究がこれらの新しい分野で飛躍的な進歩を達成しうるのであれば、それは国内の社会経済の発展にも大きく貢献できるものと信じます。そのために、科学技術基本計画に基づき、総合的見地から国を挙げての各種生命科学の研究振興と人材育成が課題であり、その過程で生まれた創造的発明の早急な実用化が望まれます。また一方で、真に価値ある先駆的研究は、個性的で創造性豊かな研究者により、また既存の制約を超えた研究環境下で、粘り強い努力から生み出されるものと期待されます。

このような認識から、本財団はバイオサイエンスの分野で有能な研究者を全国に発掘し、その創造的研究に対して資金的支援を継続することは極めて有意義であるとし、財団設立以来微力ながらも研究の資金助成および国際交流、研究集会などの助成を鋭意続けてまいりました。さらには公開シンポジウムによるバイオサイエンスの啓蒙も重要な活動となっております。これらはわが国のバイオサイエンス研究が一日も早く世界的最高水準に達することを念願してのことです。

協和発酵工業株式会社は、バイオテクノロジーと有機合成化学などの技術を基盤に広く産業活動を展開しております。同社の創設者である加藤辨三郎は企業活動の発展をめざすと共に科学技術の振興によって社会の発展と人類の福祉への貢献を同社の経営理念としておりました。加藤翁は昭和58(1983)年8月に永眠いたしましたが、40年余におよぶ会社経営の他に、わが国の多くの科学技術委員会などに関与した体験を通してバイオサイエンス振興の一層の必要性を強調いたしておりました。

こうした加藤翁の遺志を生かし、また総合的で領域横断的観点からバイオサイエンス研究振興の重要性を認識した協和発酵工業株式会社は、同社の創立40周年の記念事業として、昭和63(1988)年12月、財団法人加藤記念バイオサイエンス研究振興財団を設立いたしました。

2. 目 的 (寄附行為第 3 条)

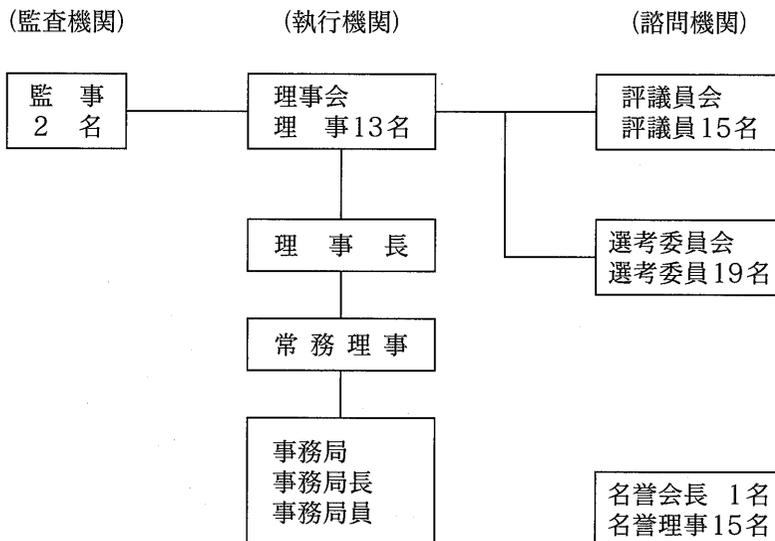
この法人は、バイオサイエンスの分野における研究者に対する助成ならびにシンポジウム・研究会の開催・助成を行なうことにより、科学技術の振興をはかり、もって社会経済の発展に寄与することを目的とする。

3. 事 業 (寄附行為第 4 条)

この法人は、前条の目的を達成するために、次の事業を行なう。

- (1) バイオサイエンスおよびこれに関連する分野における研究者に対する助成
- (2) バイオサイエンスおよびこれに関する分野における研究者の国際交流の助成
- (3) バイオサイエンスおよびこれに関する分野におけるシンポジウム・研究会の開催および助成
- (4) その他目的を達成するために必要な事業

4. 組 織



(平成19年 4 月 1 日現在)

5. 財団の概要

名 称 財団法人 加藤記念バイオサイエンス研究振興財団
Kato Memorial Bioscience Foundation
設立許可日 1988年12月23日
主務官庁 文部科学省
特定公益増進法人許可 2005年11月25日更新
基本財産 7億6百万円
出 捐 者 協和発酵工業株式会社
(東京都千代田区大手町1-6-1 大手町ビル)
URL : <http://www.kyowa.co.jp>

事業内容

1. 研究助成

助成対象

バイオサイエンスの基礎分野において、独創的且つ先駆的研究をめざす国内の若手研究者。但し、学生、大学院生、本助成金を受領後3年を経ない研究者および当財団の選考委員と同一研究室に所属する研究者は対象外とします。

助成対象 研究と 応募年齢

「研究助成」 バイオサイエンス研究分野を、①“メディカルサイエンス分野”と、②“バイオテクノロジー分野”に区分して募集します。応募年齢は男性は40歳以下、女性は45歳以下を対象とします(応募期限 8月31日現在満年齢)。

募集方法

「奨励研究助成」 バイオテクノロジー分野において領域を指定して募集します。応募年齢は男性は35歳以下、女性は40歳以下とします(同上)。

募集期間

財団指定の研究機関へ推薦依頼。当財団所定の申込書に必要事項をご記入の上、所定の推薦書を添えて当財団へ申し込んで下さい。

助成金 交付時期

6月上旬より募集を開始し、8月31日を応募締切とします。
3月31日までに交付します。

2. 国際交流助成

助成対象

海外で開催されるバイオサイエンス分野の学会、シンポジウムに発表予定の35歳(医歯学系卒業者は37歳)までの国内の若手研究者。

募集方法

公募によります。当財団所定の申込書に必要事項をご記入の上、当財団へ直接申し込んで下さい。

募集期間

前期：4月1日～9月30日の期間に発表される方は、4月1日～5月31日とします。

後期：10月1日～翌年3月31日の期間に発表される方は、4月1日から8月31日とします。

**助成金
交付時期**

前期：7月中(選考会6月)

後期：10月中(選考会9月)

(注) 上記1および2の詳細は財団ホームページをご参照下さい。

URL：<http://www.katokinen.or.jp>

3. 学会等開催助成**助成対象**

バイオサイエンス分野の学会、シンポジウム等の開催費用の助成。但し、原則として1,000人以下の規模を対象とします。

募集方法

非公募で、当財団理事または評議員の推薦によります。

4. その他、財団の目的を達成するために必要な事業

6. 平成19年度財団役員等

理事	長	平田 正	協和発酵工業(株)相談役
常務理事		土井内 徹	協和発酵工業(株)顧問
理事		大塚 栄子	北海道大学名誉教授 北海道大学監事
		大村 智	(社)北里研究所理事・所長
		岡田 吉美	東京大学名誉教授
		小田 鈎一郎	東京理科大学基礎工学部嘱託教授
		折 茂 肇	健康科学大学学長
		香 川 靖雄	自治医科大学名誉教授 女子栄養大学副学長
		岸 本 忠三	前総合科学技術会議議員 大阪大学生命機能研究科教授 (財)千里ライフサイエンス振興財団理事長
		木 村 光	京都大学名誉教授 (株)グリーンバイオ代表取締役
		高 久 史磨	東京大学名誉教授 自治医科大学学長
		別 府 輝彦	東京大学名誉教授 日本大学大学院総合科学研究科教授
		森 謙 治	東京大学名誉教授
監 事		伊 藤 醇	公認会計士
		樋 口 節夫	公認会計士 新日本監査法人代表社員
評 議 員		小 川 秀興	順天堂大学学長
		垣 添 忠生	国立がんセンター名誉総長
		勝 木 元也	自然科学研究機構理事 基礎生物学研究所名誉教授
		北 原 武	東京大学名誉教授 (社)北里研究所基礎研究所部長・客員教授 帝京平成大学薬学部教授
		郷 通 子	お茶の水女子大学学長 総合科学技術会議議員
		榊 佳 之	(独)理化学研究所ゲノム科学総合研究センター センター長
		谷 口 維紹	東京大学大学院医学系研究科教授
		鶴 尾 隆	(財)癌研究会・癌化学療法センター所長
		永 井 良三	東京大学大学院医学系研究科教授
		長 澤 寛道	東京大学大学院農学生命科学研究科教授
		長 田 重一	京都大学大学院医学研究科教授
		中 野 洋文	玉川大学学術研究所客員教授 (社)北里研究所基礎研究所部長
		西 川 伸一	(独)理化学研究所 発生・再生科学総合研究センター 副センター長
		三 品 昌美	東京大学大学院医学系研究科教授
		柳 田 敏雄	大阪大学大学院生命機能研究科教授

選考委員長 山本一彦 東京大学大学院医学系研究科教授
副選考委員長 山根久和 東京大学生物生産工学研究センター教授
選考委員 審良静男 大阪大学微生物病研究所教授
 一條秀憲 東京大学大学院薬学系研究科教授
 内海成 京都大学大学院農学研究科教授
 加藤茂明 東京大学分子細胞生物学研究所教授
 門脇孝 東京大学大学院医学系研究科教授
 久保田紀久枝 お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科教授
 五味勝也 東北大学大学院農学研究科教授
 阪井康能 京都大学大学院農学研究科教授
 住本英樹 九州大学生体防御医学研究所教授
 清木元治 東京大学医科学研究所教授
 瀬原淳子 京都大学再生医科学研究所教授
 難波啓一 大阪大学大学院生命機能研究科教授
 西田栄介 京都大学大学院生命科学研究科教授
 畠山昌則 北海道大学遺伝子病制御研究所教授
 福山透 東京大学大学院薬学系研究科教授
 水澤英洋 東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科教授
 依田幸司 東京大学大学院農学生命科学研究科教授

名 誉 職

名誉会長 木下祝郎 協和発酵工業(株)元会長
名誉理事 池原森男 大阪大学名誉教授 (株)生物分子工学研究所嘱託
 伊藤正男 東京大学名誉教授
 (独)理化学研究所脳科学総合研究センター特別顧問
 井上一郎 東京工業大学名誉教授
 大澤利昭 東京大学名誉教授 東京薬科大学名誉教授
 小関治男 京都大学名誉教授
 清水喜八郎 (社)北里研究所顧問
 白砂信善 公認会計士
 菅野晴夫 (財)癌研究会顧問
 中嶋暉躬 東京大学名誉教授 星薬科大学学長
 中村寛之助 協和発酵工業(株)元会長
 早石修 京都大学名誉教授 (財)大阪バイオサイエンス研究所 理事長

藤 卷 正 生 東京大学名誉教授 お茶の水女子大学名誉教授
(財)食生活研究会理事長

松 井 正 直 東京大学名誉教授

水 野 傳 一 東京大学名誉教授

山 田 秀 明 京都大学名誉教授 富山県立大学名誉教授

事 務 局

事務局 長 落 合 恵 子

(平成19年 8 月 1 日現在)

編集後記(財団年報2006)

集中豪雨・台風・熱波・砂漠化など、まさしく地球温暖化に伴うと思われる異常気象に関する情報が多くなり、地球規模での自然環境のぶきみな変化を実感する中で、今年もまた「財団年報」の発刊の時期を迎えました。発刊にあたり、平成16年度の研究助成受賞者から2年間の研究成果報告書や、平成18年度の国際交流助成受賞者からは学会発表報告書をご提出頂き、拝読させていただきました。助成を受けられた先生方から、「大きな支援に繋がった」とか「貴重な経験になった」などのお言葉を頂いて、事務局として大きな励みになりましたが、一方において先生方の研究現場の環境についても若干気になった次第です。

さて、当財団の平成18年度の事業活動は、冒頭の理事長のお言葉にもありましたように、特に「研究助成」事業費を600万円増額して5,000万円の助成を行うこととなりましたが、相変わらずの低金利のために基本財産運用収入が伸び悩む中、来年には財団設立20周年を迎える事も加わり、なにかと頭が痛いところです。

平成19年度は、通常の事業活動に加えて、いよいよ20周年記念事業の準備に着手致しました。当財団活動にご尽力頂いている理事・評議員の先生方のご指導を賜りながら、財団の理念にふさわしい社会貢献活動に繋がる記念事業の開催に務める所存でございます。今後とも関係各位様のご支援を賜りますよう心よりお願い申し上げます。

2007年 8 月 落合恵子 記

(財)加藤記念バイオサイエンス研究振興財団
財団年報第8号(平成18年度)
Annual Report of Kato Memorial Bioscience Foundation
Vol.8(2006)

発行日 2007年8月1日
発行者 理事長 平田 正
編集者 常務理事 土井内 徹
事務局長 落合 恵子
発行所 財団法人 加藤記念バイオサイエンス研究振興財団
〒194-8533 東京都町田市旭町3-6-6
電話・ファックス：042-725-2576
メール：ben.kato.zaidan@kyowa.co.jp
ホームページ：http://www.katokinen.or.jp
印刷 興和印刷株式会社
〒279-0003 千葉県浦安市海楽1-5-11

